

○内田圭一¹(¹ 東京海洋大学学術研究院海洋資源エネルギー学部門)

- 1) はじめに 現在、東京海洋大学には海鷹丸（1886t）、神鷹丸（986t）、汐路丸（775t）3隻の練習船が所属している。これらの練習船は、水産学または商船に関する学部を設ける大学には、教育研究に必要な施設として練習船（共同利用も含む）を置くものとするとして、文部科学省大学設置基準第39条（附属施設）に従い、東京海洋大学の付属施設としてある。ここでは大学練習船の役割について、東京海洋大学のうち、海洋生命科学部と海洋資源環境学部を例に紹介する。
- 2) 運用状況 上記2学部は旧東京水産大学の流れを汲む。本学は三級海技士（航海）第一種養成施設の登録を受けており、海洋工学部は商船系の、上記2学部は水産系の船舶職員養成教育を行っている。海鷹丸・神鷹丸による航海は、主に水産系の船舶職員養成教育の乗船履歴に関わる実習航海になる。その概要は、学部3年次に開講される乗船実習Ⅱ（本州沿岸・1ヵ月間）、学部4年次に開講される乗船実習Ⅲ（東シナ海方面・1ヵ月間）、乗船実習Ⅳ（本邦南方海域・3ヵ月間：航海は1ヵ月程度）、海洋科学専攻科における乗船実習（太平洋、インド洋、南氷洋・7ヵ月間：本邦から2,000海里離れた海域を航行）からなる。このように、練習船の航海は船舶職員養成が前提となる航海が主となっている。
- 3) 調査研究での利用 練習船の航海は上記を目的として設定されているが、運営費交付金の減少や運航に係る諸費用の上昇に伴い、交付金だけでの運航が難しくなっている。こうした中、実習航海の一部に外部資金や受託研究を受け入れることで、不足分を補う動きが進んでいる。その例として、環境省受託研究「沖合海域における漂流・海底ごみの分布調査検討業務」がある。この調査は、従来から練習船が行ってきた水産資源調査に関わる実習を応用することで実施可能なものとなっている。そして、実習生の協力によって行われる漂流ごみの目視調査は、調査をしながら航海した分の費用が負担されることから、調査を依頼する側と受ける側の双方に利点のある取り組みとなっている。こうした取り組みは、実習航海に参加する学生にとって、先進的な調査研究に触れる貴重な機会となっている。
- 4) 課題 外部資金の受け入れや共同利用など練習船の幅広い利用が求められる中、一方で働き方改革による労務管理の厳格が進んでいる。限られた人材と時間で実習・調査研究をいかにしてバランスよく実施して行くかが今後の重要な課題となる。

The role of training ship - example of Tokyo University of Marine Science and Technology -

*K. Uchida¹ (¹ Tokyo University of Marine Science and Technology.)